

静岡地学の創刊に際して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-12-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々倉, 航三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026186

静岡地学の創刊に際して

佐々倉航三

たしか小学校の4、5年生頃のことであつたろうか、当時淡褐色の表紙がついた理科の国定教科書中にいくつかの鉱物について記されていた。方解石の複屈折は子供心には魔法のようにも思えたり、また30種ほどが一組になった鉱物標本を買ってもらって朝夕その鉱物を箱から入れたり出したりして、ひとり悦にいった記憶などもある。中学校では4年で地質鉱物学を教わり、旧制高等学校では理科1年で結晶学、岩石鉱物学などを教わったが、結晶学が試験直前の一夜づけではなかなか理解しにくくて、ひどく低い注意点をもらった恥しい経験がある。地学といえばこのように昔は地質学関係のものに限られていたのが常識であり、天文学や気象学に関する知識は中学では5年の地理学通論でそれらの初歩的なところをごくあっさり通り抜けただけであった。万有引力などは物理で教わったが、ケプラーの法則はたしか高等学校の物理で教わったように思う。ご承知のように天文学や気象学が地学の中に含まれて地質学と並んで教えられるようになったのは戦後のことであり、戦前には天文学や気象学はそれぞれ旧制大学の専門学科を除いてはどこでもほとんど全く教えられなかったといっても過言ではない。ところが時代の急速な進展は天文学や気象学にも一般人が大きな関心を持たざるをえないような情勢となり、今日ではすでに月世界への旅行もある程度まで具体的に計画されているほどである。

アジア大陸と太平洋の境に位置するわが国の気象が千変万化する様相と、それによる災害は機械文明の進歩とともに増大する一方であり、気象学の初歩的知識は今日では日本人の科学常識の一つでなければならないほどになってしまったのである。また大地震が比較的多く発生するわが国では、最近に至ってようやく地震予知の大問題に対し本腰を入れて立ち上ったようである。

地震予知研究委員会の幹事長である萩原尊礼博士は筆者が高等学校時代に一つ釜の飯を食べた同宿の親友であったことも嬉しい限りであり、今後の活躍健闘を心から祈っている。

筆者が13年前静岡大学に着任以来柄にもなく地震学の初歩を講義しているのも治りにて乱を忘れずの心構えに他ならない。

上述のような一般情勢にかんがみて本県でも数年前から地学関係の学会を持ちたいという声があ

ちこちに聞かれるようになったが、ようやく機は熟して本年6月28日に静岡県地学会が結成され、本会の機関誌として“静岡地学”を刊行することが議決された。会則によっておのづから明かであるように本会の主たる使命は“地学教育”と“地学研究”の進歩発展に寄与することであり、したがって機関誌の内容もその線に沿って編集されるべきものと考えられる。本会は誕生以来まだ半年にも満たないみどり児であるが、本県下における自然の愛好家や篤学の諸賢が挙って本会の趣旨を理解され、振るって入会されるのみならず地学教育や地学研究に関して世を益する原稿を続々と寄せられることを念願してやまない。

私はもとより浅学非才の身であるが、健康の許す限り進んで犬馬の勞をとる決心である。

(会長)

祝 辞

中 江 齊

このたび、静岡大学地学の先生方の御指導のもとに、静岡県地学会が生れ、同会機関紙が創刊されますことに対し、心からおよろこびを申し上げます。

同会は、本県地学ならびに地学教育の進歩発展を目ざして本年5月から発足されました。地学にしても、生物学にしても、理学の中でこの方面の学術的な探究はもとより、教育に関しても最も重要な時機と段階を迎えております。この時に県内の地学ならびに地学教育研究の担手として、活発な活動と事業が行なわれますことは、まことに意義深いものがあることと存じます。

静岡県理科教育協議会は、来年度から改組された静岡県高校理科教育研究会と静岡県小中校理科教育研究会の連絡協議機関として、新に発足しましたが、高校理科教育研究会には、物・化・生・地の4部会があり、小中校理科研究会には第1、第2分野として、地学教育の研究が行なわれてまいりました。今後はこれら研究会と密接に連絡を頂き、静岡県地学会が支えとなって頂けますようお願いし、同会が益々発展をいたされますよう念願して、一言御祝福の言葉といたします。

(静岡県理科教育協議会長)